

平成 22 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520108  
 研究課題名（和文）近代ギリシャ絵画研究 新古典主義の受容とビザンティンの伝統  
 研究課題名（英文）The study of the Greek modern paintings - The acceptance of the Neo-Classicism by the Greeks and their tradition from the Byzantine Art

研究代表者  
 木戸 雅子（KIDO MASAKO）  
 共立女子大学・国際学部・教授  
 研究者番号：10204934

研究成果の概要（和文）：従来日本のみならず、西欧でもほとんど研究対象とされてこなかった独立戦争以後のギリシャの近代絵画を、ヨーロッパとギリシャ側からの視点で検証した。ギリシャ近代絵画の創生期には、主としてドイツ（バイエルン）の画家（P.フォン・ヘス等）の描いた独立戦争をテーマにした絵画が、ギリシャ人画家の手本となり主題や表現様式などにおいて、その後の近代ギリシャ絵画の方向づけに影響を与えたというその過程を追うことができた。

研究成果の概要（英文）：The study for the paintings of the Modern Greece after the war of independence has not been interested by the European scholars nor the Japanese. The purpose of this project was the consideration to the problems of the new paintings by the Greek artists through the Greek eyes and the European. In the early period after the independence, mainly Bavarian artists influenced and directed them for themes and style.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：西洋近代絵画史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：ギリシャ近代絵画史・ギリシャ近代史・19世紀ドイツ絵画・ナザレ派・19世紀フランス絵画・新古典主義絵画・ロマン派・ギリシャ独立戦争

## 1. 研究開始当初の背景

ビザンティン美術を専門とする本研究代表者が、ビザンティン以後（ポスト・ビザンティン）時代にビザンティン絵画がどのように変遷したかを研究する過程で、いくつかの顕著なビザンティン・リヴァイヴアル的美術動向を検証した。中でも20世紀前半のギリシャ人画家たちに大きな影響を与えた画家であり文筆家のフォティス・コントグルの著作や絵画作品を通して、20世紀のギリシャ人画家に

とって西欧的絵画とビザンティン絵画の伝統の間にあるギャップをいかに埋めるかが大きな問題であることを知るに至った。その問題を考えるにはギリシャが西欧文化と直に触れ合った独立戦争期にさかのぼって検証する必要がある。

19世紀初頭は、西欧は古代ギリシャへ関心に向け、独立戦争に際し古代ギリシャへの憧憬と異教徒トルコに対するキリスト教圏の防衛の意図を持ってギリシャを援助した。そ

のことはギリシャ独立戦争に義勇兵の一人として参戦し、ミソロンギ(メソロンギ)で没した詩人バイロンを通してよく知られている。西欧絵画にギリシャ独立戦争をテーマにした絵画(ドラクロアの「ミソロンギに立つギリシャ」など)がある一方で、一向にギリシャ人側からの西欧へのまなざし、あるいは民族の解放戦争をテーマにした絵画が問題にされることは日本は当然ながら、西欧でも皆無に等しい。西欧のギリシャへの関心はもっぱら古代であったし、今も古代ギリシャを中心にして、せいぜいビザンティン美術までである。コンスタンティノポリス陥落以後のギリシャ人たちに関心を向けるということはほとんどない。

このほば一方通行なみのアンバランスは、日本が明治以来経験した西欧絵画の受容と伝統的日本画の継承の問題と似ている。その経験を持つ日本人だからこそ、西欧の研究者にはない独自の視点で近代ギリシャ創生期の絵画を検証することができるのではないかと考え、日本におけるフランス19世紀絵画、ドイツ19世紀絵画の専門家とギリシャ絵画の専門家と共同研究を立ち上げ、それぞれの研究分野による視点を生かしつつ、新たにギリシャ側に立って西欧を見直すという両方向から見る近代ギリシャ絵画史を検証してみようという研究計画がまとまった。

## 2. 研究の目的

独立後のギリシャは、近代国家の仲間入りを果たすために、西欧的基準にかなない、また国民的・民族的特質にもかけていない美術の創出の必要に迫られていた。ヨーロッパの新古典主義、ドイツ・ロマン派の影響から始まったギリシャ近代絵画の歩みの中で、ギリシャ人にとっての近代とは何であったのか、ヨーロッパの影響と彼らの本来の美術的伝統であるビザンティンの表象を核に研究する。

従来はヨーロッパ側から(オリエントの一部として)の視点でのみ語られるだけであったが、ギリシャ側から見たヨーロッパや、ヨーロッパを通して知った「古代ギリシャ」、そしてビザンティンの伝統への執着など、ギリシャが経験した近代化の過程とその結果を読み解くことを目的とする。特に独立戦争直後からの数十年間の初期の状況に焦点を絞って検証する。

## 3. 研究の方法

(1) ギリシャにおける現地調査: ギリシャにおける美術館所蔵の研究対象の年代の画家とその作品の調査(資料収集と分析)ならびにギリシャ独立以後のアテネを中心に建設された新古典主義的建造物に描かれた壁画群の調査。近代ギリシャ創成期に関するギリシャの研究者たちとの意見交換。文献資料の整理と分析。ドイツ、ミュンヘンのノ

イエ・ピナコテークにおける作品調査及び文献資料の収集。

(2) 研究分担: ギリシャ人側から見た西欧絵画とそれ以前からの伝統的視覚的表現であるビザンティンの伝統との関係(木戸雅子)。

当時のヨーロッパ絵画の牽引役を務めていたフランスの同時代の画家たちの見たギリシャとその表現、及びギリシャの画家たちに与えた影響(鈴木杜幾子)。ドイツ(ミュンヘン)からオゾンに同行してギリシャに赴いて独立戦争時代のギリシャを描いたドイツ人画家たちの作品とそのギリシャへの影響(大原まゆみ)。

(3) 現地調査: 主要調査対象 新古典主義的壁画(アテネ大学講堂、王宮(現国会議事堂)シロス島の市庁舎と個人邸宅及び教会の装飾) 美術館所蔵の絵画(ベナキ美術館、アテネ絵画館、アテネ市立美術館、ナフプリオンにあるアテネ絵画館別館等。研究者と協議し、本研究の意義を理解したうえで調査研究のアドバイザーとして知識の提供を受けた(アテネ絵画館のマリア・ランブラキ館長、ベナキ美術館の水彩・素描部門主任学芸員のファニ・ツイガク氏)。日本では入手不可能な、現地の美術館でのみ入手できる文献資料等の収集。

## 4. 研究成果

### (1) 時代的背景

15世紀以来オスマン・トルコ支配下にあったギリシャは、1814年の民族解放結社結成、1821-29年の解放戦争を経て、1830年のロンドン会議で主権を承認された。解放の後ろ盾となったのは主に英仏露の列強だったが、新国家統治の引き受け手捜しは難航し、結局バイエルン国王ルートヴィヒ1世が、若年の次男オットー(ギリシャ名オゾン、在位1832-62)を送り出した。在位中、首都の整備や大学創設をはじめ、法制度や科学技術など広範な「西洋」文化がギリシャに移植され、また、バイエルンの諸教育機関でギリシャ人留学生を多数受け入れるなど、大規模な交流が行なわれた。

ミュンヘンの建築家たちによるアクロポリス復興計画や、王宮を始めとする多くの新しい古典主義的建造物が次々に建てられ、新生ギリシャの首都にふさわしいものとして公共建築の設計が行われた。またそれを飾る絵画、彫刻、装飾などがドイツを中心にイタリア、フランスの芸術家によって、俄かに新しく建設された建造物を埋めていった。早くも1836年には、アテネに美術学校と美術協会が設立され、ギリシャ人の建築家や画家たちへのヨーロッパ的美術教育が始められた。その教育に携わった人々の多くはミュンヘン出身であった。

### (2) バイエルンの美術活動と、そこにみる

## ギリシャの主題と様式

ルートヴィヒ1世(1786 - 1868)下のバイエルンは、王自身が率先して美術振興に力を入れた。彼個人の美術好きに加え、バイエルンは王国に昇格して日が浅く、かつヴィッテルスバハ家の系統統合により、小さな町だったミュンヘンが首都となったため、王都にふさわしい都市計画が必要とされたこと、そして軍事的な政治力では列強に太刀打ちできない中小国家として、王が文化立国を意図していたことが、その背景にある。バイエルンはドイツ諸国の中では早くに立憲化し、この点からも公共施設の整備は望まれた。

新古典主義世代でフィルヘレニストである王は、L・フォン・クレンツェやF・ゲルトナーを宮廷建築家に迎え、古代ギリシャ様式の公共建築を多数建設、同じく新古典主義のL・シュヴァンターラーらの彫刻、そしてイタリアから帰還したP・コルネリウス、J・シュノルらナザレ派の大画面絵画が公共空間や宮廷を飾った。また、美術館を開き国民の啓蒙に供した。エギナ島アフェア神殿破風彫刻を核とするグリュプトテーク、中世・近世の絵画を集めたアルテ・ピナコテーク、同時代の美術をリアルタイムで揃えていくノイエ・ピナコテークは、コレクションのみならず、美術館建築とその内装という新たな領域を開いたことでも注目される。同美術館の重要作品には、オットーのギリシャ入りをめぐるP・フォン・ヘスの同時代歴史画、ギリシャ風俗画や景観画、そしてC・ロットマンのギリシャ風景画サイクルがあり、主題としてのギリシャへの注目度の高さ、特に風景画では新境地が開かれたことがわかる。

### (3) ギリシャの美術活動と、古代ギリシャの「逆輸入」とギリシャの近代化

キリスト教によるビザンティン世界からトルコ時代を経て解放されたギリシャは、西洋経由で自国の過去を再発見し、利用することになる。エギナ島のアフェア神殿破風彫刻は、西洋での価値を知らない所有者によって消石灰相当の価格で売られたが、バイエルンからは古代ギリシャ讃美のみならず考古学も移植され、忘れられた過去の文化の価値を知らしめた。また、バイエルン等の西洋の美術家の手になる王宮・大学等の新たな建築とその内装が具体的な指針となり、1850年代頃からは、ミュンヘンで美術教育を受けたギリシャ人たちが活躍するようになった。

遺跡がなお残る建築や彫刻に比べ、西洋独特の発達を遂げた歴史画は、ギリシャにとって「他者の方法による自己の表現」として、従来からのビザンティン絵画を世俗化した伝統的な表現を守る一派よりも大きな葛藤、あるいは挑戦の場を画家に与えたと推測される。1830・40年代の歴史画は、既に西洋でも近代的に変質しており、「同時代」や「民族の過去」

を、世紀初頭の新古典主義に比べ、より写実の度合いや色彩への関心を強めた様式で描いていた。

新生ギリシャにとって最重要の、「近過去」にして「ナショナル」な歴史主題である解放戦争と建国について、どのような場面をどのように描くかの範例は、まず外から、つまり、シュヴァンターラー原案によるアテネ王宮のフリーズや、ヘスの原図に基づく石版画集『ギリシャ解放 39 図』がもたらした。ギリシャ人としてこの分野に精力的に取り組んだのは、ミュンヘンに学んだT・ヴリザキス(1819 - 78)であり、コルネリウスの弟子W・カウルバハに通ずるアカデミー様式による作品を50・60年代に生み出した。

オットー追放後はバイエルンとギリシャの関係は弱まるが、美術上のつながりは世紀末まで消滅することなく、N・リトラス(1832 - 1904)やG・ヤコヴィディス(1853 - 1932)らの優れた風俗画家のほか、N・ギシス(1842 - 1901)のような象徴主義者を生んでいる。

参考文献：字数の都合で、集大成的な1点のみを挙げる。

Reinhold Baumstark (Hg.), *Das neue Hellas; Griechen und Bayern zur Zeit Ludwigs I., Ausstellungskat.*, Bayerisches Nationalmuseum, München, 1999, 648S

### (4) フランス美術との関係

建国後のギリシャ絵画へのフランス絵画の影響。ミュンヘンとの関係にくらべると、フランス絵画との直接的関係は薄い。両国の美術の関係がより密接になるのは、少し遅れて1863年以降となる。この点に関しては、すでにアテネの国立絵画館で興味深い展覧会『パリ・アテネ』展が開催されている。この展覧会は、1863~1940年のギリシャとフランスの関係がテーマとされており、同展カタログは両国の関係についての基本文献として重要である。

*Paris-Athènes, 1863-1940, expo. cat.*, Athènes, Pinacothèque Nationale et Muséum Alexandros Soutzos, 20 Décembre 2006-31 Mars 2007

しかし本研究では独立戦争後から1863年以前までの時期による両国の関係を絞った。フランス美術史においてその時期はロマン主義から写実主義へ、また両者と並行していたアカデミズム(「中庸派」、「サロン絵画」、「ポンピエ」などと言いかえてもよい)の時代に当たる。この展覧会は、本研究の研究協力者であるアテネ国立絵画館の館長ランブラキ氏の発案、企画によるものであり、そのコンセプトで明確に示されているようにフランスが近代ギリシャ絵画史に重要な役割を果たすことになるのは、本研究で対象にした独立戦争直後の時代よりも30年ほど後の時代になる。

ギリシャ独立戦争を主題とするフランス絵

画

1863年以前のフランス美術におけるギリシャとの関係でもっとも注目すべきは、ギリシャ独立戦争の主題を扱ったフランスの画家の作品の多さである(素描、版画等も含む)。一般にヨーロッパにおけるグreek・リヴァイヴァルは、イギリス人建築家スチュアートとレヴェットが18世紀後半に行なったアテネの古代ギリシャ遺跡の実測に始まるといわれ、その後新古典主義時代を通じてイギリスの古代ギリシャへの関心は絶えなかった。さらに独立戦争当時、詩人パイロンがギリシャ支援のためにミソロンギに赴いたこともよく知られている。それにもかかわらずイギリスにおいては独立戦争そのものを主題とする絵画はきわめてわずかしか制作されなかった。またイギリス以外の国ではイタリアに少数の作例が存在するのみである。

このようにギリシャ独立戦争は、ドイツを除く同時代以降のフランス絵画にほぼ特化された主題であったといえる。この現象の原因・背景については当時のヨーロッパ、ないしフランスの政治事情と各国の美術的・文化的伝統の広範な調査が必要とされ、本調査では結論を出すに至らなかった。

ギリシャ独立戦争関連のフランス絵画にかかわる基礎文献:

Nina Athanassoglou-Kallmyer, *French Images from the Greek War of Independence, 1821-1830*, Yale University Press, 1989.

・Caire Constans, Marina Lambraki-Plaka, etc., *La Grèce en revolte, Delacroix et les peintres français, expo.cat., Musée des Beaux-Arts, Bordeaux / Musée national Eugène Delacroix, Paris / Pinacothèque nationale, Musée Alexandre-Souzos, Athènes, 1996* ~ 7 上記文献に付されたリストによれば、1821~48年に、のべ約80名の画家によって描かれたギリシャ独立戦争関連の絵画(水彩、素描含む)が発表されたという。作品数は100点を超す。

上記文献で知られるように、独立戦争関連のフランス人画家の作品は多数に上るため、ここではその一部を挙げるにとどめておく(下記リスト参照)。個々の作家、作品についてのより詳細な分析と記述はここでは省くが、これらの作品にみられる問題点はおよそつぎのようなものである。

フランスでギリシャ独立戦争のギリシャ側に共感を抱いた知識人は自由主義者が多かったが(この戦争はフランス革命の影響の下、19世紀前半のヨーロッパ各国であいついだ革命的運動の一つと考えられていた)独立戦争を描いた個々のフランスの画家たちの政治的スタンスは不明、ないしあいまいである場合が多い。とはいえそこに共通する主題は、「キリスト教対イスラム教」、「文明対野蛮」

の対立および前者の勝利といえるかもしれない。またこれらの作品には古代ギリシャへの暗示はほとんどなく、むしろエグゾティスムやオリエンタリズムの一環として描かれている。これを美術史に沿っていうならば、フランスのギリシャ独立戦争の絵画には新古典主義的要素はなく、ロマン主義、あるいはそれと共通性をもつ中庸派的な特質がみられるということになる。

フランス人画家によるギリシャ独立戦争関連の絵画の作例リスト(戦争中に制作されたもの。画家の生年順。)

テオドール・ジェリコー (Theodore Gericault, 1791~1824) <パルガ>(素描) 制作年不詳 パリ、ギャルリ・デュ・フルーヴ/ジェリコー作? (Gericault?) <ミソロンギからの脱出> 制作年不詳 ニコシア(キプロス) 大司教館

アリ・シェフェール (Ary Scheffer, 1795~1858) <戦いの中、聖母の加護を願うギリシャの乙女たち> 1826 東京、国立西洋美術館 / <スリオート族の女たち> 1827 261×359 パリ、ルーヴル美術館 / <失われた祖国を岩の上から見つめるギリシャの亡命者たち> 制作年不詳 アムステルダム、歴史博物館

ウジェーヌ・ドラクロワ (Eugène Delacroix, 1798~1863) <キオス島の虐殺> 1824 パリ、ルーヴル美術館 / <ミソロンギの廃墟に立つギリシャ> 1826 ボルドー、美術館

アルフォンス・アポロドール・カレ (Alphonse Apollodore Callet, 1799~1831) <パルガの人々の乗船> 1827 ルーアン、美術館

アンリ・ドゥケーヌ (Henri Decaisne, 1799~1852) <作戦の失敗> 1826 アテネ、ベナキ美術館

(5)ギリシャ人画家による独立戦争関連の絵画

ドイツ語圏や数は少ないがフランスの画家との接触によってギリシャ近代絵画が生成していったわけであるが、これまでの調査で純粹に新古典主義的なギリシャ絵画は少ないことが判明した。逆に近代ギリシャの画家に「オリエンタリズム」的な自己表現がみられることは、ギリシャ語以外で読める数少ないギリシャ近代美術概論であるギリシャ国立美術館のガイド・ブックに「オリエンタリズム」の章が設けられていることにも示されている。Marina Lambraki-Plaka, etc., *National Gallery-Alexandre-Souzos Museum, Four Centuries of Greek Painting, from the Collections of the National Gallery and the Euripidis Koutlidis Foundation, National Gallery-Alexandre-Souzos Museum, Athens, 2000*, pp. 94 ff. とはいえここで取りあげら

れている画家は 1830 年代以降生まれで活動期間が本調査の範囲から外れているため、彼らの作品が中近東主題の一部としてギリシャを扱っていることを指摘するにとどめるが、近代ギリシャ絵画史におけるヨーロッパから導入された新古典主義的絵画、ロマン主義的歴史画の手法による独立戦争を主題とする絵画、さらに自らの国土（古代の遺跡を含む）を描く風景画というヨーロッパ人が見た（描いた）ギリシャによって自らを描く方法を学んだギリシャ人たちがそれによって結局どのように「ギリシャ」を描くことになったのかはやはり 1860 年代以降のギリシャ人画家の作品の検証が必要である。上記のランブラキによれば、世紀中葉、建国以来の外国人支配に疲弊したギリシャでは、「東洋による東洋」が新しいスローガンになったという。とすればギリシャの自己意識は当時「東洋」であったということになり、我々西洋美術史研究者が抱いている「ギリシャ」のイメージは大幅な修正を余儀なくされる。ギリシャ人画家による独立戦争関連の絵画についての基本文献は次のとおりである。これにはギリシャ国立絵画館に収蔵されているギリシャ独立戦争関連の美術品（各分野含む）68 点が記載されているが、その作者の大多数はギリシャ人である。Olga Mentzafou-Polyzou, *1821 Figures & Themes from the Greek War of Independence in 19th Century Painting from the Collections of the National Gallery and the Euripidis Koutlidis Foundation, expo. cat., National Gallery-Alexandre-Souzos Museum, Nafplion Annex, 2004*. この展覧会への出品作品の多くには、フランスのギリシャ独立戦争の絵画と共通するロマン主義、あるいはそれと共通性をもつ中庸派的な特質がみられる。

（6）建国後のギリシャ美術（イコン画家による独立戦争の絵画表現）マクリヤニス将軍による独立戦争の合戦図の試みについて

19 世紀ギリシャでは、古代ギリシャ尊崇が外来のものであったことに対抗して、ビザンティンの伝統への思いも強かった。その顕著な例が将軍マクリヤニスの注文により描かれた 1821 年の独立戦争の戦闘場面の連続絵図におけるビザンティン・イコンへのこだわりである。

独立戦争をギリシャ人独自の表現方法で描いた作例として特筆に値するのが、このマクリヤニス将軍の記憶によるギリシャ独立戦争の連作戦闘図である。これは、しばしば、当時のギリシャ人画家による民衆的表現の作例として語られ、独立戦争直後のギリシャ人が残した独立戦争の記録としての重要性は認められるものの、その作風はプリミティブで美術作品としての価値が語られることはほとんどない。

確かにその後のギリシャ絵画史に、この作品が発展的に影響を及ぼしたということではなく、上記のように突然ヨーロッパの同時代美術を導入し、その手法で自らの独立戦争の場面を描くことを学んだということは事実である。だからこそ、それによらない、自らが慣れ親しんだビザンティン絵画の伝統の名残りをみせるこの作品によって、独立直後のギリシャ人の視覚を検討することが重要になる。

独立戦争を戦った英雄ルメリ出身のイオアニス・マクリヤニスは、独立後のギリシャの初代将軍となる。彼はペロポネソス半島での戦いで軍功をあげた勇士であったが、学問はなく読み書きができなかったにもかかわらず、それを学びながら、自らの戦闘の『覚え書』を執筆した。それをもとにマクリヤニスはイコン画家ディミトリオス・ゾグラフォス、その息子パナイオティスに指示し全 24 点の戦闘場面の連作図を描かせた。完成までに 3 年間（1836～39 年）を要した。各絵図の周囲には、マクリヤニスのテキストの抜粋がキャプションとして記されている。各戦闘図は絵地図的な鳥瞰図的構図を配し、その中にはフスタネラを着た戦う兵士の群れが描かれている。

決して教養人ではなかったマクリヤニスだが、これを制作させるにあたり、すでに宮廷で主流だった西欧絵画の様式を選ばず、伝統的イコン画家を選んだことが興味深い。まず板にテンペラ技法で描かれ、その後厚紙に水彩による別の 4 シリーズの写しが作られた。最初の板絵のシリーズの完成を記念してマクリヤニスは、各国大使を招き展示会を開いて紹介している。さらに紙に水彩で描いた写しをそれぞれの国の元首に贈呈した。このシリーズの第一図が大変興味深い。18 世紀以来のポスト・ビザンティンのイコン画のごとく、中央にパントクラートルが座し、エラス（ギリシャの擬人像）とヴィクトリア女王、フランス王フィリップ、ロシア皇帝ニコライがあたかも聖人のごとくに並び、その左右にイコンの寄進者としてオソン 1 世とアマリア女王が並び、それを取り巻く空間がキリスト教的宇宙図として構成されている。これに続く戦闘図においては、マクリヤニスは事実在即して独立戦争を視覚的に記述すること限られたモチーフで記号的に描くこと、内陸部の合戦や船の海戦は地図的パースペクティブで配置することなどを原則としている。

4 シリーズのうちヴィクトリア女王に寄贈された完全なシリーズが、手紙とともにウィンザー城に残る。その手紙によれば、マクリヤニス自身はその仕上がりには満足していなかったようである。これを制作させた時期には、マクリヤニスは宮廷人として活躍しており、宮廷の西欧絵画的表現をすでに見ていたはずである。あくまで伝統的イコン画の様式にこだわってはみたものの、彼自身もその結

果は西欧絵画に見劣りがすると思ったのであろう。しかし彼が教養人でなかったことが、当時の一般的ギリシャ人の眼差しを知る手掛かりとなる。彼もそうであったように当時の民衆の識字率が低かったことが、彼に一連の独立戦争の真実を絵画で残そうとさせたのではないか。そのためには当時の民衆に最もふさわしい様式を選ぶ必要があったのである。これは独立以後急速に西欧化した絵画がいかにギリシャの民衆の視覚的世界と異なるものであったかの証といえよう。この絵図の制作に際して、まず西欧の画家を招いたがすぐにそれを断念したとされる。その理由はいろいろに解釈されてはいるが、西欧的な知識を全く持たないマクリヤニス自身にとって、西欧から流入した絵画の様式が自分の求めるイメージとかけ離れていたであろうことは想像に難くない。彼にとってこの大事な民族の解放のドラマを描く方法は、彼の親しんでいたビザンティン以来の伝統的スタイルでかつ平明なものであるべきであった。

上記のごとく第一場面の銘文には、この戦闘図集を「ギリシャ人とギリシャの支援者であった親ギリシャの国の人々への感謝を捧げるために制作した」と記している。マクリヤニスは始めから独立戦争を支援した国々へ寄贈する意図を持ち、ギリシャ人からの視覚的メッセージとして列強の王たちに堂々と贈っているのである。満足なものとは言えないといっているものの、そこに彼のギリシャ人としての誇りが読み取れる。

本作品は、現在板絵がアテネの国立歴史博物館に、水彩画のヴァージョンの一部がゲナディオス図書館とベナキ美術館に所蔵されている。本研究はこの3箇所での調査を行った。

(7) 本研究を発展的に継続する際の今後の課題

このような「古代ギリシャ、ビザンティンの伝統、オリエンタリズム」という三要素が複雑に絡まり合うギリシャ近代絵画のなかでも、独立戦争関連の絵は、民族意識や宗教意識が関わるだけに分析対象として興味深い。特にテオドロス・ヴリザキス (Theodoros Vryzakis, 1819~78) は、父が独立戦争で戦死したといわれ、本人も早くにミュンヘン・アカデミーに留学して独立戦争を主題とする作品も多いだけに重要である。フランスと直接的接点はないが、彼の作風には同時代のフランスの中庸派と共通するものが感じられ、本研究でも常に参照すべき対象である。

1863年以前のフランス美術とギリシャ人芸術家の接触は多いとはいえないが、その中で特筆すべきは、1840年から43年にかけてアテネで美術学校を主宰していたリヨン出身のピエール・ボニロート (Pierre Bonirote, 1811~91) である (この学校は当時「美術建築学校」、または「美術工芸学校」と呼ばれていた

が、それが実態に即した名称かどうかは不明である) 次期調査において、この学校とそこでボニロートに師事したギリシャ人芸術家の詳細が判明することを望んでいる。

同様に本研究が対象とする1863年以前にフランスに滞在したギリシャ人画家ゲオルギオス・マルガリティス (Georgios Margaritis)、フィレンツェでアングルに影響を受けたというニコラオス・クネラキス (Nikolaos Kounelakis) などについても継続調査を行いたい。

また、19世紀後半のギリシャの近代絵画にヨーロッパ絵画の動向に呼応するさまざまな表現様式が登場するものの、20世紀に入ってマクリヤニスのように自らのアイデンティティをアイコン画に求めようとする復古的絵画の推進者 (主にフォティス・コントグル) たちの顕著な活動がある。それを視野に近代ギリシャ絵画における西欧と伝統的表象の関係を時代を下げて検証してゆきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

木戸雅子、ギリシャ独立戦争の表象 フスタネラ、国際服飾学会会誌、査読有、34巻、2008、4-11

〔学会発表〕(計4件)

木戸雅子、日本におけるギリシャ学の意義と現状、希・日修好110周年シンポジウム、2009年11月26日、アテネ音楽堂 (アテネ)

木戸雅子、サラミナ島のパナイア・ファネロメニ修道院壁画修復の意義、ファネロメニ修道院壁画修復シンポジウム、2009年3月19日、ビザンティン美術館 (アテネ)

木戸雅子、フスタネラーギリシャ独立戦争の表象、国際服飾学会、2007年6月21日、共立女子大学

木戸雅子、ディオニシオス・エク・フルナ『エルミニア』の日本語への翻訳、ディオニシオス・エク・フルナ協会主催シンポジウム、2007年5月27日、イアノスホール (アテネ)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

木戸 雅子 (KIDO MASAKO)  
共立女子大学・国際学部・教授  
研究者番号：10204934

##### (2) 研究分担者

鈴木 杜幾子 (SUZUKI TOKIKO)  
明治学院大学・文学部・教授  
研究者番号：70162972  
(H20 H21: 連携研究者)

##### (3) 連携研究者 (2007~2008)

大原 まゆみ (OHARA MAYUMI)  
明治学院大学・文学部・教授  
研究者番号：70185362  
(H20 H21)